



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 104
Issue Date	1939-03-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77656">http://hdl.handle.net/2115/77656</a>
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part36.pdf



[Instructions for use](#)

## 芒亭書屋談叢

去る二月十七日學校神社の月次祭の祭禮のあとで、今度卒業する諸君がクラス毎に記念樹の植ゑつけをした。本校では卒業生の記念樹はこれが嚆矢である。これから年毎に新卒業生の記念樹がクラス數丈づつ加はつて行く譯である。

私等は常に先へ／＼と將來の夢に心を躍らすと共に、過去の自分の足跡を愛撫しては自己を勵まし自己をいたはつて居るものである。其足跡は大なる足跡も、いと小なる足跡も、共に自分自身にはかけがへのない尊いものである。

私は少年の頃、其頃よく遊んで居た郷里の自分の家の附近にあつた小高い丘の上の椿の木の樹皮に自分の名の頭文字を小刀で彫り込んだ事がある。そしてそれから餘程年を経て、當時遊學して居た東都から歸省した時、椿の木の文字が妙にふくれた様になつては居ても未だ讀めるのを見てよろこんだ事がある。其後更に何年かの後復た歸省した時、丘の附近の樹木は全部伐り倒されて、其邊は皆蜜柑畑になつて居た。私は其を見て、非常に尊いものを失つた様な失望を感じた事を今も記憶して居る。シューベルトの「リンデンバウム」の歌詞の中にも、郷里の家の前の菩提樹に文字を彫り込んだ追憶が述べてある。郷里の思慕を其菩提樹に呼び起し、更に少年の日の追憶を其處に彫り込まれた文字に蘇がへらして居るのである。

死んだ愛兒の玩具をいつまでも大事に保存して、死兒の齡を數へつゝ思慕の情やるかたなさを空しく慰むる親の心には、愛兒の體臭の加はつたものはどんなものでも尊いのである。

卒業する人々の一クラスの名の下に、其總力によつて作られたもの或ひは一クラスの全員の呼氣のかゝつたものとして、學園の中に其儘に永久に残るものとしては記念樹の外に何があるかしら。記念樹は永久に其クラスの人々の云はば客觀的標識である。

あの記念樹をあつた天氣のよい早春の一日、クラス全員の手をかけて植ゑつけ、そして其あとで一同神社に参拜したあの時の記憶は、永久に諸君の心に残るであらう。

だが、そんなセンチメンタリズムは今はどうでもよい。勇躍して早く生活の戦線につくがよい。

そして雄々しく強く正しく存分に活躍するがよい。國家の爲に又自己の爲に。東亞の歴史的大偉業は、諸君の新鮮なる力を至るところで待つて居る。記念樹は、大丈夫大切に保存してあるであらう。